



# 雑談の会



川崎ゆきお

「今日は晴れましたねえ」

「昨日はずっと雨で、外に出られませんでしたよ。いや出ようと思えば出られるのですがね。しかし雨じゃ気も滅入る。だから、出かける気になれませんでしたよ」

「いや、僕は雨の日でも出ますよ。それが日課なのでね。そうでないと一日を過ごした気になれない」

「私は傘を盗られたのがショックでしてね。それがトラウマで、雨の日は縁起が悪い日と決めつけるようになりました」

「そういう話もいいのですがね」

「はあ、何か」

「いつ頃から、こんな話がメインになったのでしょうかなあ」

「はあ？」

「昔は、こんな話、どうでもいいと思ってましたよ。ただの天気の話だしね」

「まあ、そうなんですが」

「嫌じゃないんですよ。決して」

「はい」

「しかし、このシフトの仕方は何だろうねえと思ひましてね」

「シフトですか」

「こんなどうでもいいような話題へシフトしてしまったって、ことですよ」

「でも、これが最新の旬の話題でしょ」

「まあ、そうなんだが、それはまあ否定はしない。しかし……」

「しかし？」

「もっと有益なというか、もう少しレベルの高いというか、教養というか、社会性のあるというか」

「ああ……」

「だから、否定しているわけじゃない」

「でも、重い話、たとえば、うちの孫が妙なことになっているような話など、しんどいでしょ」

「まあ、それは気楽には聞けません」

「だから、何処かで止めているんですよ」

「フィルターをかけていると」

「言っても仕方のないことがありますからねえ」

「なるほど」

「だから、傘を盗られたとかの話で十分なんですよ」

「なるほどねえ」

「あなたのような人、多くいますよ。でもそういう人は、一人で動いています。ほら、あの席にいる真っ白な頭で、きっちりとした身なりの人、いるでしょ」

「よく見かけます」

「同じ年代ですよ」

「そうだね」

「いつも一人です。きっとあなたは、あのタイプと、私らのグループとの中間なんですよ。私は嫌ですよ。あの一匹狼は。だって、楽しそうじゃないですから」

「あの人、いつも一人で本を読んでいるねえ」

「相手がないから、本を読んでいるんですよ。本当は、私らと混じりたい」

「そう思うかね」

「いや、それはまあ勝手な想像ですがね。でも、晴れてるとか、曇ってるとか、腰が痛いとか、そんな話もしたいんじゃないですか」

「それは、どういう意味があるんだろう」

「同じように生きて、暮らしているってことですよ。その中身は、まあそれほど突っ込まない」

「でも、あの人から見れば、我々は馬鹿に見えるかもしれないよ」

「いえいえ、その他大勢の集まりでいいんですよ。この船はそれなりに乗り心地がいいんだ」

「深い浅いの問題はどうなんだろう」

「似たようなものですよ」

「いやいや、重い話をしてしまいました」

「いいですよ。たまには」

「これもまた雑談だね」

「そうそう。雑々でいいんですよ。雑々で」

「うむ」

了